



## 被災者に贈る希望の鐘の音 「鎮魂と希望の鐘」と「保存ロータリーライド時計」

第2670地区 世界社会奉仕委員会委員長 森本奈津子

東日本大震災から1年  
後の2012年3月11日、

北は北海道中標津、南は長崎県諫早からのロータリアン約30人は、観光バスで、盛岡から遠野、釜石、大槌町を通り過ぎ、岩手県下閉伊郡山田町へ向かっていた。この日、ガイドを務めてくださった大久保舞さんは、山田町に親戚がいると話し始め、震災以降の町の様子を涙で声を詰まらせながら語ってくれた。

美しいリニア式海岸沿岸部には大小150の浜があり、浜ごとに漁を生計とする集落が成り立っていた。トンネルを抜けると目の前に浜が広がり、またトンネルを抜けると浜が目に入る。しかし、浜の風景は、決壊したままの堤防、津波の爪痕の残る変形した道路など、6か月前に訪問した時とほとんど変わることなく無情な姿をさらしていた。どこまでも続くかのような穏やかな砂浜は、津波に砂がさらわれ急深の海岸に変わった。振り返ると、急勾配の山が迫り、代替居住地を探すのが容易でないことはわれわれにも理解できた。

親しい人を亡くされた方々にとっては一周忌にあたるこの日、海に向かって祈りをささげる人、コンクリートの土台だけが残った家があったであろう場所に花を手向ける人の姿に、震災後どのような一年であったかをおもんばかり、胸の詰まるような道中であった。

### 焼け焦げたロータリー徽章の大時計

昨年6月5日、第2520地区パストガバナーの田口良一氏と菊池弘尚氏、盛岡北ロータリークラブ(RC)の会員とローター・アクターの計20人は、山田町の「なかよし公園」で山田RCの震災後初例会をサポートした。

真新しいロータリー旗と国旗の贈呈、盛岡北RCから鐘を寄贈し、山田RCの阿部幸栄会長による復興を祈念する点鐘は感動の瞬間であったそうだ。協同の奉仕活動として「なかよし商店街」で炊き出しや支援物資の提供をし、今後も支援を続けるという約束をして山田町を後にした。

その帰りに立ち寄った一面焼け野原の中のJR陸中

山田駅。一同の目に真っ先に飛び込んできたのは、駅舎の上で焼け焦げ、3時27分に針が停止した無残な姿のロータリーの徽章の大時計（直径1.5m）であった。後に、この時計は、山田RCが創立記念に町に寄贈し、以来41年間町民の皆さんに時を刻み続け愛されてきたものだとわかった。故郷の大惨事に驅り立てられる毎日のように被災地に足を運ぶ盛岡北RC会員でパストガバナーの田口良一氏と直前会長の田口絢子氏の夫妻は、この時計のことがとても気がかりになり、山田町を訪問するたびに行方を追った。時計は山田の駅舎の解体に合わせ、町役場のごみ収集場に放置された。たまらなくなつた田口絢子氏は、山田RCの阿部会長と連携し、防災の意識高揚と記憶の継承の意味を込めて永久保存の方法を模索する、という方向で関係各所に働きかけることになった。

### 「鎮魂と希望の鐘」建立へ

昨年9月、第2500地区（北海道東部）、第2520地区（岩手・宮城）、第2670地区（香川・愛媛・徳島・高知）、第3350地区（タイ・カンボジア）の4地区合同で大槌町の小中学校6校にロータリー財団のマッチング・グランツ事業としてピアノ寄贈プロジェクトを実施させていただいた（『友』2011年12月号横組みP16～17）。

活動を通じて常に情報を共有していた第2500地区ロータリー財団副委員長の笹谷芳夫氏が、地元の標津郡中標津町の開阳台に、所属する中標津RCが30周年の記念事業として寄贈した“幸せの鐘”的写真をFacebookへアップした。360度見渡せる視界と透き通るような青い空に魅せられてYoutubeの動画を探してみた。鐘の音色は、地球の裏側まで届きそうな澄んだ音色であった。笹谷氏にお聞きしたところ「鐘は小樽の木下合金で

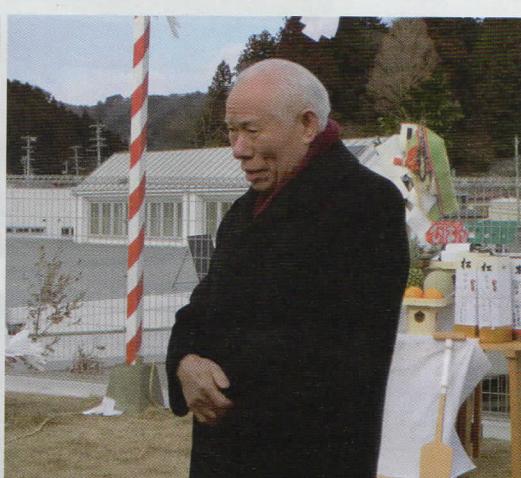
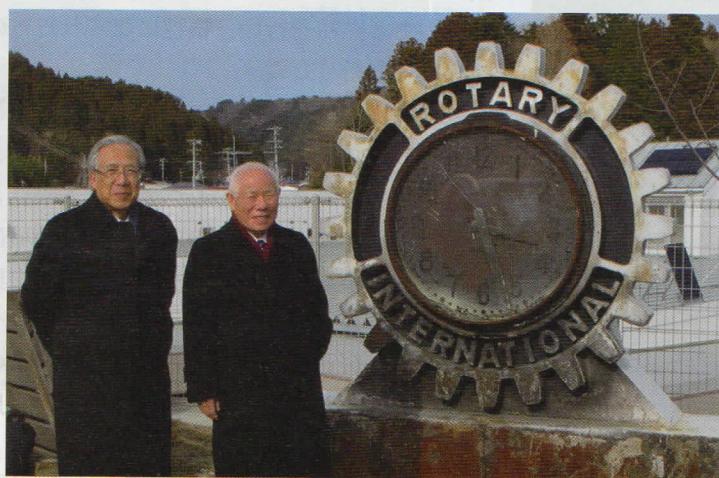
製作し、カラヤンが世界で一番美しい音色の鐘と言った長崎の鐘がモデルになっている」ということであった。

震災以降、現地で活動する第2520地区のロータリアンにとっては、毎日毎日が歎哭の日々であり、お亡くなりになられた方の魂を鎮め、被災された方が悲しみから癒やされる“何か”が必要であると感じ模索していた時期であった。被災された方の“鎮魂”“癒やし”になるかどうかわからなかったが、鐘の音色で少しでも気持ちが晴れるのではないかという気がし、すぐさま田口絢子氏に連絡を差し上げた。

11月21日、田口良一・絢子夫妻は、中標津の“開阳台幸せの鐘”を視察の後、山田RCへ情報を伝えた。山田RCの阿部会長も賛同し、“開阳台幸せの鐘”的きょうだい鐘を山田町に建立し、併せて、ロータリーの大時計を設置する方向で、関係各所に働きかけることになった。

事業の最大の難問は用地であると思われた。いまだ被災された方の多くは避難所で生活しているだけではなく、町の復興計画も描けない状況である。にもかかわらず、山田RCの阿部会長は、行政から全面的な支援を得、江戸時代に年貢米の一時貯蔵場所として、また旧山田町庁舎、旧図書館が設立されていた恐らく山田町で歴史上一番由緒ある「御蔵山」という最高の場所をご提供いただいた。これにより3月11日に焦点を合わせ事業は一気に進展した。

第2670地区へは、年度が始まる前から、1978年の夏からの青少年交換のマッチド地区である第7470地区（アメリカ）から、ロータリー財団の日本復興基金への1万ドルの送金のほかに、約5万ドルと目標を設定したチャリティーイベントを開催するので、ロータリー財団のマッチング・グランツ事業の企画ができるかという



一月六日、田中作次RC会長が出席して、地鎮祭が行われました。

申し出をいただいていた。

笛谷氏がロータリー財団との事前折衝を繰り返してくださったが、最終的に補助金対象として認めることはできないという最終回答がもたらされたのは11月末日であった。第7470地区には「Bell of Requiem and Hope」プロジェクトを世界社会奉仕という位置づけで拠金をお願いした。

鐘は中標津の鐘同様に小樽の木下合金、コンクリートアーチは中標津コンクリート、総合設計は第2520地区パストガバナー・小川惇氏の設計事務所、周辺工事は盛岡の高光建設と決定し資金総額も明らかになった。資金提供を申し出ていた第2670地区に続き、第2500地区も増田ガバナーのGOサインをいただき、国際ロータリー(R I)会長エレクトの田中作次氏が在籍する第2770地区からも支援が寄せられ、事業総額950万円が見事に集められた。

2012年1月6日、「鎮魂と希望の鐘」の地鎮祭と、山田RCの新年初例会が予定された。1月ながら晴れ渡り春を待つ雰囲気であったこの日、直後に国際協議会を控え多忙を極めていたR I会長エレクト・田中作次氏と、元R I理事・黒田正弘氏が駆けつけてくださったそうだ。地鎮祭は、山田町の沼崎町長を迎えて厳かに執り行われた。

田中氏に碑銘の揮毫をお願いしたところ快く引き受けてくださったとお聞きした。そして、国際協議会開催中の最も忙しい時期に揮毫してくださり、関係者一同、氏の心の大きさ懐の深さに感じ入った。

### 支援の灯を贈り続けたい

2012年3月11日、ロータリーの各地区の代表、多



くの報道陣や町民の方々とともに私たちは山田町御藏山に立っていた。御藏山のすぐ前には、一年前の今日、地域に牙を剥き襲いかかってきた山田湾が広がっていた。空には亡くなられた方々の涙かとも思われる冷たい涙雪が舞っていた。

除幕式は沼崎町長のあいさつのあと肅々と進行し、サイトウ・キネン・オーケストラ&いわてフィルのメンバーが讃美歌「主よ御許に近づかん」を厳かに奏でた。

純白の幕に覆われた「鎮魂と希望の鐘」「保存ロータリーライフ計」の除幕は、元R I理事・黒田正弘氏、第2500地区・増田一雄ガバナー、第2520地区・菅原一博ガバナー、第2670地区PG・飯忠悟氏(美馬精一ガバナー代理)、第2770地区・井橋吉一直前ガバナー、そして全世界に会員を有するロータリーらしく、第7470地区からマジソンRCのエルスワース氏らが務め、続いて一人ひとりの祈りをのせて「鎮魂と希望の鐘」が打ち鳴らされていった。

帰りの便の関係で一足早く帰路に着いたわれわれは、被災時刻の午後2時46分を、宮古市の海岸から山川へ

曲がるカーブの地点で迎えた。田口良一氏の発声のもと黙祷を行い、犠牲になられた方のご冥福をお祈りした。

陸前高田、大槌町に次いで人口に対する被災者の割合が高い山田町で、今回のプロジェクトが被災された方々の心へ響き、未来へと希望をつなぎ、山田駅舎の時計同様に地域に長く根付く事業であることを願いつつ、復興には程遠い長い年月を要する破壊された街への、時間が経過するごとに薄れていく支援の灯を、ささやかながら贈り続けたいという思いを共有した除幕式の参加であった。

\*文中の役職は、当時のものです。

心は共に

